

総評 2021.3月分 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「雷鳴の夜に臓器を抱え行く」(まぢりこ)

「臓器を抱え行く」という透けるような、かつ生々しい身体が、生きることの孤独や心細さを切実に表している。

「肩に彫られたあの鳥は／正午になると／壁掛け時計へ出勤し、鳴く」(田中傲岸)

「お母さんをやめて／鏡のいろして／しゃべる生き物になって」(青野椰栄)

いずれも、主体が「わたし」を規定するものから抜け出していくさまが鮮やかに捉えられている。

「父の袖口は／何かを避けてのびていると／はっきり知る」(青野椰栄)

個人の事情を引き受けてのびている、生き物のような「袖口」がユニーク。

「牛乳パックを／綺麗にたたみ地平線」(まぢりこ)

「たたむ」という所作をきっかけに、「牛乳パック」からぱっと現れる「地平線」が美しい。地続きである、ということの稀有な感触がかすかに伝わってくる。

「体育館の檜上は／まるで／しんと降る雪の中のように／最後まで／声が震えた」(風船)

雪が運んでくる真新しく清潔な空気が、「緊張感」を巧みに伝えている。

「ひかりをかざせば／知性の色に輝く赤子の掌」(サトリ)

「赤子」の「赤」という字によって視覚的に補強され、浮き彫りになる血潮が鮮やか。こういう「知性」の説明の仕方があるのかと静かに腑に落ちるものがあった。

今月も、推敲のあとが残る、磨かれた作品に多く出会いました。来月も楽しみにお待ちしています。